



宮城県仙台第二高等学校

2年 上松 咲愛 小野 杏菜 工藤 美来

回復者さんや療養所の職員の皆さんへの取材を通して、これまで知らなかったハンセン病問題の深刻さを知ることができました。これからは分からないものに対して差別をするのではなく正しい知識を元に行動していきたいと思います。また、私たちの学びを伝えることで若い世代へのハンセン病問題の周知や差別問題の解消に努めていきたいです。

学校法人開智学園 1年

1年 五十嵐 優華 友利 航 エンゾ 呂 韓暢

「主体的であることの大切さ」。それが今回の活動を通して私たちが強く感じたことです。今までハンセン病問題は私たちには関係のないことだと思ってきました。しかし、実際に資料館に赴いたり、回復者の方にお話を伺ったりして能動的に知ることで、差別は他人事ではないんだと実感を持って学ぶことができました。これからもこの意識を胸に、学ぶことを続けていきます。



学校法人開智学園 2年

2年 佐藤 凧紗 中村 亨也

活動を通じ、当事者の多様な経験や事実を知る重要性を学びました。同情ではなく、国の政策や背景を主体的に判断する力を養い、相手に合わせた伝え方を工夫する大切さを実感しています。今後は情報に惑わされないアンテナを張り、無意識に他者を傷つけぬよう、自分にできる行動を地道に続けていきたいです。

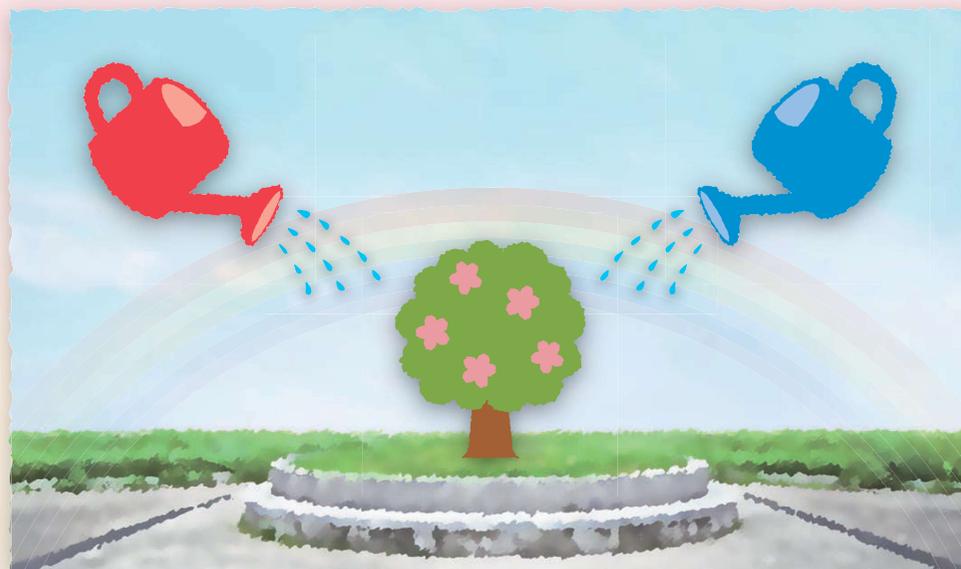
第25回 ハンセン病問題に関するシンポジウム 人権フォーラム2026

ハンセン病問題をたどろう

～差別のない社会の花を咲かせよう～

Contents - 目次 -

- 2 ハンセン病問題・歴史
(記事：学校法人開智学園 1年)
- 4 ハンセン病の今、開かれた園
(記事：宮城県仙台第二高等学校 2年)
- 6 回復者家族の被害、家族訴訟
わたしたちができる啓発活動
(記事：学校法人開智学園 2年)



ハンセン病とは？

「らい菌」という細菌に感染することで引き起こされる感染症の一種です。感染により皮膚と末梢神経が侵されることで、皮膚の病変や知覚麻痺、四肢の運動障害や変形などが現れます。誤った認識から、差別や偏見が起こりました。しかしらい菌は発症させる力が非常に弱く、1941年には薬が開発され、現在は薬による治療のみで治る病気になりました。ハンセン病は入院する必要もなく、仕事や通学を継続しながら治療できる普通の病気です。

後遺症について

ハンセン病は早期に治療を始めれば、障害を残さず治すことができます。しかし、治療薬がなかった時代に病気が進行してしまった人や治療の開始が遅れた人には後遺症が見られます。後遺症には知覚麻痺や運動障害などがあります。また、後遺症があっても、ハンセン病が治っていればその人が感染源になることはありません。



画像提供：国立ハンセン病資料館

—— 過去を学び、今を問い、外へ未来へ
差別のない社会をあなたの手で ——

ハンセン病問題とは？

第2次世界大戦終結以前にはハンセン病に対しての有効な治療法が存在していませんでした。そのため人々はハンセン病を「感染したら治らず、顔や指が変形する恐ろしい病気」と思い込み、ハンセン病患者や元患者、その家族が差別の対象となりました。

1907年に政府が「癩予防二関スル件」という法律を制定した事によりハンセン病に関する差別の助長と、日本でのハンセン病患者隔離政策が開始されました。このページでは療養所が患者に対して行った人権侵害の1つである重監房について辿ります。



懲罰用の建物「重監房」

群馬県草津町にある国立療養所栗生楽泉園の敷地内にかつてあった、ハンセン病患者を対象とした懲罰用の建物です。正式名称は「特別病室」といいます。しかし、「病室」とは名ばかりで、実際には患者への治療は行われず、患者は生命が脅かされる劣悪な環境に閉じ込められました。



重監房全体模型図



壁とかに手をついたらくっついてペリペリになっちゃうような寒さだよな。怖いなあ。

え！あんな卓球台2台しかないような場所で4~5人で暮らさなきゃいけない時もあったの？信じられない！

重監房では寒い時には-20℃近くになることもあったんだよ。

しかも夏は蒸し風呂みたいに暑くなるんだよ。

そうだね。到底人が住める環境じゃないよね。

102歳のハンセン病回復者の北野貞晴さんのお話をまとめました。

Profile

北野 貞晴さん(102歳)

大正12年生まれ、大阪府堺市出身。4人兄弟の長男として生まれる。小学4年生のときにハンセン病を発症。

14歳で湯ノ沢集落に行ってから、神山復生病院、多磨全生園などを転々とした後、20歳で栗生楽泉園に着く。そこから81年間栗生楽泉園で暮らす。

100歳を超えて大阪で一人暮らしをすることを決意し、101歳から大阪で一人暮らしをする。



ハンセン病回復者 北野さん



ハンセン病回復者 北野さん

どうして大阪で一人暮らしをしようと思われたのですか？

2001年に熊本地裁で国の隔離政策が違憲だとされてから療養所を出て社会復帰をする人もいましたが、私が大阪に帰って家族が差別されると思ったら怖くて帰れません。けど時間が経って、お世話になった叔父や叔母も亡くなり、代が変わって、自分のことを知る人がいなくなったので帰る決心ができました。

大阪での一人暮らしはどうですか？

療養所から来た私のことを快く思わない人もいます。でもまあ差別する人もいれない人もいます。それだけのことです。心配したら何にもできねえよ(笑)



高校1年 友利さん



高校1年 友利さん

ハンセン病の歴史

- 1873年 ノルウェーの医師アルマウエル・ハンセン氏が「らい菌」を発見。
- 1907年 主に浮浪患者の隔離を目的とする「癩予防二関スル件」公布。
- 1916年 「患者懲戒・検束二関スル施行細則」により、所長に療養所内の患者を取り締まる懲戒権が付与される。
- 1929年 患者を地域から排除する「無癩県運動」が官民一体で始まる。
- 1931年 「癩予防二関スル件」が「癩予防法」となり、すべての患者の療養所への強制隔離が可能となる。
- 1936年 内務省が「20年根絶計画」策定。無癩県運動を通じて「患者狩り」が全国的に広がる。栗生楽泉園内に「特別病室」(通称「重監房」)が設置される。
- 1943年 アメリカでプロミンの治らいう効果発表。
- 1945年 第二次世界大戦終結。
- 1946年 「日本国憲法」公布。「基本的人権の尊重」が盛り込まれる。「重監房」廃止。
- 1947年 厚生省「無らい方策実施に関する件」により、「第二次無らい県運動」が始まる。
- 1948年 「全国らい患者プロミン予算獲得闘争委員会」設置。厚生省予算による患者慰安金の支給が決定。
- 1949年 厚生省による全国でのプロミン治療費5,000万円の予算が成立。
- 1951年 全国国立療養所患者協議会(全癩患協。翌年に全患協へと改称。現在の全療協。発足)。
- 1953年 「らい予防法」施行。これにより強制隔離継続が決定。
- 1957年 厚生省、菌陰性者の退所基準を作成。
- 1964年 六・五闘争勃発。厚生省や園内で、抗議活動が行われる。
- 1981年 WHO、「らい病」に「らい予防法」廃止、「らい病」という呼称が、「ハンセン病」になる。
- 1988年 熊本地裁にて、「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」提起。
- 1998年 翌年には、東京地裁と岡山地裁でも提訴。
- 2001年 「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」熊本地裁が原告勝訴の判決を下す。政府は控訴せず、原告の全面勝訴が確定。「ハンセン病療養所患者入所者等に対する補償金の支給等に関する法律」施行。
- 2008年 「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」公布。
- 2019年 ハンセン病回復者の家族が、国の隔離政策に伴い深刻な被害を受けたとして「ハンセン病家族国家賠償請求訴訟」を熊本地裁に提起。
- 2019年 「ハンセン病家族国家賠償請求訴訟」熊本地裁が回復者家族原告勝訴の判決を下す。政府は控訴せず、原告の全面勝訴が確定。「ハンセン病元患者家族に対する補償金の支給等に関する法律」施行。
- 2024年 家族の補償金請求期限が5年間延長され、2029年11月21日までとなる。

現状はどうなっているのか？



Profile

松丘保養園 入所者自治会会長 12歳のときにハンセン病であることが分かり15歳で療養所に入所し、現在は松丘保養園で入所者自治会会長を務めています。

佐藤 勝 さん

療養所での生活はどのようなものでしたか

15歳で療養所に入所して3年間は病棟にいました。私はハンセン病のために中学校に行くことができず、療養所に入って2年越して教科書を開きました。ところが、学校に通い始めて2週間ぐらい経って40度近い熱が出て学校どころじゃないわけだ。その間に同級生は岡山県の高校に行きました。夜布団かぶって泣いたよ。悔しくて。時が経って20歳になったときに一般寮に入りました。中古の自転車を買って毎日のように港に行ったもんです。あの船に乗ったらどこまで行けるかなあ、と思ったりして眺めていました。仕事は、包帯集め、薬の配達、目の見えない人の手伝い、落ち葉清掃なんかをやりました。仕事仲間と温泉に行ったりカラオケをしたり、それが楽しかった。そうしているうちに事務所の役員になるようにとお声がけいただき今の立場になりました。



高校2年 工藤さん



松丘保養園 佐藤さん

ハンセン病の偏見や差別で特に印象に残っている体験はありますか

ハンセン病でありながら自宅にいた父親が亡くなったときに、土葬をしにきた村人が父が埋葬された上の土を踏みつけにやと笑ったんです。ほら見ると言わんばかりに。そのことだけは60年経った今も忘れません。後は、私が買い物に行ってお金を払うときに店員さんがお金を直接受け取らなかったことがありました。怖いと思ったんでしょうね。熊本判決で勝訴した後ですよ。あれだけマスコミが騒いでたんだけど、不思議なものです。聞こうとしないのか、見ようとしぬのか。それだけ浸透してないんだな。



高校2年 工藤さん



松丘保養園 佐藤さん

ハンセン病問題をどのようにして後世に伝えればよいと思いますか

まず療養所を残すことだと思います。平均年齢が90歳近い我々が1人もいなくなったときに療養所をどのように残していくか。特に納骨堂なんかね。松丘保養園に眠るのは1182柱。自分の地に帰りたいことも帰ることができないんです。管理をしないとあの建物なんだろうとなくなってしまう。



高校2年 工藤さん



松丘保養園 佐藤さん

どんな社会になることを望みますか

どんな人に対しても慈しむ心を持ってもらいたい。今、自分さえよければよいという風潮があるじゃない。このような社会はなくなっていかなければなりません。



高校2年 工藤さん



松丘保養園 佐藤さん

若い世代に伝えたい一言はありますか

「差別は悪」この一言です。

佐藤さん、インタビューに答えていただきありがとうございました。



高校2年 工藤さん



松丘保養園 佐藤さん

東北新生園の特徴

登米市の新田村にある第二次世界大戦の戦下の中に開園されました。特に大きな特徴として、園全体として開かれているという点です。大きな壁や土塁が築かれているということはほぼありませんでした。また、入所者さんの多くが農家出身であったため、新田村の開墾を手伝ったことから、地域とのつながりがある園と言えます。

差別を感じにくかった

映画上映会が東北新生園の園内で開催された際、入所者さんと一緒に同じ場所で区切られることなく映画を観ていました。地域の人たちから強い差別を受けていなかったことが伺えます。しかし園内の学校を見ると、入所している生徒と指導補助の方の出入り口や部屋が、園外から来る先生とは分けられていたことなどから、差別が存在していたことがわかりました。

現在の園内

東北新生園に入所されている方々が地域に恩返ししたいという思いで、園内の使わなくなった土地を使って地域の方に訪れてもらえるような場所になっています。かつて分校として使われていたところを資料館にすることで歴史を風化させないようにしていたり、使わない場所をパークゴルフ場にすることで地域の人と一緒にゴルフをしたりしています。

職員(看護師)の方々のお話

少しでも生きてよかったと思ってもらえるように、日々の身体的なケアや入所者さんの想いを叶えるお手伝いをしています。入所者さんと接するとき、相手の過去を考慮することでよりよいケアを提供しています。納骨堂を新しくしたり、慰霊塔を建てるなど園内で亡くなり帰るところがない人にも寄り添う温かい活動をしています。



パークゴルフ場・東屋



しんせい資料館



陸橋

写真提供：東北新生園(3点)

松丘保養園に触れる

松丘保養園内の納骨堂や建てられた慰霊碑をご紹介します。

納骨堂

入所者により築られました。「亡くなくても故郷に戻ることができない」多くの入所者が眠っています。



火葬場跡

火葬に伴う作業は入所者が行っていました。その歴史を伝えるため現在は慰霊碑が建てられています。



失われた命の慰霊碑

園内の斬首・墮胎によって生まれることができなかった子ども達のための慰霊碑です。



写真提供：松丘保養園(3点)



Profile

回復者家族 Mさん
 両親がハンセン病回復者で、療養所内で生まれます。当時の政策で親族間を転々としたり深刻な差別を経験。自身の体験・ハンセン病問題を次世代に伝えていきます。

たくさんの差別があった

両親とは離れて暮らしていたんですが、集落の人たちは親のことを知っていたので、同級生や近所のおばさんからも汚いものを見るような嫌な目で見られていました。同級生からはいじめを受けて、畑のものを盗んで来るように強要されたりしました。

両親と繋がりがたくても

小さいときに父と母に会えなかったこと、一緒に生活ができなかったことが1番辛かったことです。でも、父と母は私にとっても愛情を向けてくれました。その愛があったから何を言われても「自分のせいじゃない、自分は悪くない」と思ってなんとかやってこれました。

未来の若者に向けて「真実を判断する力を持ってほしい」

「かわいそう」とか同情するんじゃないで、ただそういう事実があったことを知ってほしい。それは差別や偏見というより、国がどんな政策をとってきたか、その結果として起きたことなんだっていうのを分かってもらいたい。

今はインターネットで情報が溢れているからこそ、振り回されずに、自分の目で聞いて、調べて、「本当はどうなんだ」って考えるアンテナを、いつもも張っておくことが大事だと思う。だからこそ、自分で判断する力を持ってほしい。



1 隔離が生んだ「家族の分断」と苦難

かつて国が進めた「無らい県運動」などの強制隔離政策は、患者本人だけでなく、その家族の人生も大きく変えてしまいました。家族は「恐ろしい病気の家系」という世間の偏見にさらされ、進学や就職、結婚の拒絶、さらには縁組みの解消といった深刻な差別に直面しました。差別を恐れて親族との縁を切り、自らの出自を隠して孤独に生きることを余儀なくされるなど、政策によって平穏な家庭生活を営む権利が根底から奪われたのです。



2 歴史を動かした「家族訴訟」の判決

2016年、国の誤った政策により長年差別を受けてきた家族たちが、国を相手取り損害賠償を求める裁判を起しました。2019年6月28日、熊本地裁は「国の隔離政策が家族への差別を助長した」として、国の法的責任を認める画期的な判決を下しました。国はこの判決を受け入れ、控訴を断念。これにより、患者本人だけでなく、その家族もまた国の被害者であることを司法が公式に認め、謝罪と補償への道が開かれることとなりました。



3 差別をなくし、共に生きる社会へ

判決後、家族への補償金の支給を定める法律が成立しましたが、長年の差別による心の傷が癒えたわけではありません。今もなお、自身の経験を誰にも打ち明けられずにいる家族も多く存在します。この裁判の真の解決は、経済的な補償だけでなく、社会全体がハンセン病への正しい知識を持ち、偏見をなくすことにあります。過去の過ちを繰り返さないために、私たちはこの歴史を学び、誰もが自分らしく生きられる社会を築いていく必要があります。



「開智学園2年」の私たちは、現在ハンセン病問題の啓発活動を2024年から行っています。次世代を担う者同士がハンセン病問題を一緒に考えることにはきっと大きな意味があるだろうと思い、行動をしました。

文化祭@開智(2024年度)



Mさんへのインタビュー内容を、意図を汲み取りつつ要点を絞って言語化することに苦労しました。自分の言葉で噛み砕くことと、本来の意味を損なわないようにすることの塩梅が難しかったです。

また、保護者の方々を対象としたプレゼンテーションでは、人生経験豊富な保護者ならではのアドバイスをいただき、伝え方の工夫の仕方を考え合い、プレゼンテーションが一段レベルアップする良い機会でした。

小中学校での啓発授業

ハンセン病問題を「学ぶ」立場から、人に「伝える」立場へと一歩踏み出した経験でした。歴史や差別の実態をどの程度理解してもらえるのか不安を感じながら、伝え方について深く考え続けました。少しでも自分のこととして受け止めてもらえるよう、クイズを取り入れたり、「もし自分だったら」と想像してもらおう問いかけをしたりと工夫しました。また、小学生へのプレゼンテーションは初めての経験で、Mさんの思いをかみ砕きながら、本質を損なわず正確に伝えることの難しさも実感しましたが、「伝える」ことの意義を改めて考える機会になりました。



こども霞ヶ関見学デー



主に小学生を対象に紙芝居で発表を行いました。歴史や差別の実態を子どもが理解できる言葉で表現する難しさを痛感しました。少しでも自分事として捉えてもらうため、クイズや「もし自分だったら」と考える質問を投げかける工夫を凝らしました。また、保護者へのプレゼンでは教わることも多く、Mさんの思いを噛み砕き、本質を損なわず的確に発信する大切さを学びました。この経験を糧に、相手に響く伝え方を今後でも追求したいです。

文化祭@開智(2025年度)



Mさんに直接幼少期から現在までどのようにハンセン病問題に向き合ってきたのか、未来の若者にどのように考えてもらいたいのか、話をいただきました。現在も地元ではハンセン病問題の話がしづらかったりする、と仰っていました。

私たちだけの啓発活動だけでなく、実際に経験した方の話を交えることにより、より多くの人に生の声を聞いてもらうことができました。

私たちのような啓発活動が大切になる一方で、実際に経験した方の話は、重みが違うな、と感じました。そして、生の声を人々に聞いてもらう大切さに気付かされました。